

## 叱咤時脱落説の批評的検討

辻口雄一郎

### 1 叱咤時脱落説と面授時脱落説

道元の身心脱落については、古くから如浄と道元の面授の際に身心脱落があったとする説と、いねむりする僧を如浄が叱咤した瞬間に身心脱落が起こったとする説とがある。これらの両説は、いわば宗学の伝統的見解とされてきた。しかし、昭和44年に高崎直道氏によって道元の身心脱落は「心塵脱落」の聞き違いではないかとの指指がなされ（角川書店『仏教の思想』11）、さらには、昭和52年に杉尾玄有氏による叱咤時脱落はなかつた、とする新説（山口大学教育学部研究論叢 第二十六巻第一部「原事実の発見」）が出されるに及んで、以来活発な議論が行われることになったのである。

ところで叱咤時脱落説に関しては、近年石島尚雄氏や下室寛道氏などによつてあらためて積極的な主張がなされているが私は、これを虚構であると考えている。私は道元の著書のどこにも書かれていない「叱咤時脱落」の説が、今日なお繰

り返し主張される背景には、身心脱落とは何であるか、という点に関する思想的検討がこれまで十分になされてこなかったことがあるのではないかと考えている。本稿は、直ちに「身心脱落」如何を問うものではないが、さしあたり、叱咤時脱落説の問題点を検討し、その暗黙の前提となつている「身心脱落」観を明らかにすることで、後続の論稿に備えんとするものである。

### 3 叱咤時脱落説の起源

叱咤時脱落説は三つの部分から成立している。一つは如浄が居眠りする僧を叱咤する部分、第二は道元が身心脱落の語を聞いて開悟する部分、そして第三は道元が自らの悟りを如浄に告げ、如浄がこれを証明する部分である。以下これらの各部分に関して問題になる点を整理してみたい。

まず第一の部分についてであるが、如浄が大眾指導においてたびたび居眠りする僧を叱咤ことについては『永平広録』

や『隨聞記』に道元自身の言葉として記録されているので、そういう事実があつたことに疑いはない。また真福寺所蔵草案本「大悟」巻には、如浄が常日頃から「參禪者身心脱落也、不是待悟為則」といつて大衆を指導し、夜間には「雲堂裏にして拳頭と同時に霹靂」したと書かれているので、そうした際に、身心説落の話をもつて叱咤したことも大いにあり得ることである。しかし草案本には「先師、よのつねに衆にしめしていはく」として、この身心脱落の話を取り上げているのであるから、道元にとつて、諸伝の伝える叱咤時脱落があつたとされる時期において、この言葉は決して耳新しいものではなかつたはずである。日頃から「身心脱落」について思量を重ねていて、ついに得心が行つた、というのであれば、それを「豁然大悟」というのは如何にも不自然ではないだろうか。

第二の部分については、これに対応する記述が道元の著作に見られない。もちろん道元の悟りが身心脱落であること自体については、何ら疑う余地はないが、しかし、それをある時点での出来事として記述した部分はどこにも存在しない。

「佛祖」巻の末尾に「如浄大和尚道元大宋国宝慶元年乙酉夏安居時、先師天童古佛大和尚に参侍して、この佛祖を禮拜頂戴することを究盡せり、唯佛與佛なり」と書かれていることをもつて、これが第二の部分に対応する記述であると推測する論者もいるが、それは叱咤時脱落の説を前提にしてはじめる

て云えることなので、この説を補強するものとはなり得ない。

次に第三の部分、如浄による印可証明を記載する部分であるが、この様な両者のやりとりに関する記述も、やはり道元の著作のどこにも見当たらない。しかし、これについても真福寺所蔵草案本「大悟」巻に注目すべき記述がある。それは先の如浄の指導ぶりについての記述に引き続き、「身心脱落は脱落身心なり。脱落の脱落しきたれるがゆえに、身心説落なり」と書かれていることである。この文言は、諸伝の伝える道元と如浄のやりとりに、あまりにも類似している。石島氏は、これによつて叱咤時脱落説の正当性を主張しているのであるが「道元禪師と身心脱落―特に身心脱落の資料をめぐつて―」（『曹洞宗宗学研究所紀要』八号一九七〇年）、これについては、すでに石井修道氏によつて指摘されているように、如浄の説示は「參禪者身心脱落也、不是待悟為則」とするものであるから、その内容からいって叱咤時脱落のごとき特異な瞬間をもつて身心脱落とするのではないことは明瞭である。だから、むしろこの草案本の内容と叱咤時脱落説との文言の奇妙な一致は、伝記作者が、草案本の内審を知つていて、そこから伝記の記述を作り上げたと考えるほうが自然であるうと思われる。

以上叱咤時脱落説について各部分に分けて検討したが、いずれの部分についても道元の著作や、道元の言葉を伝える

『永平広録』、『随聞記』などに、その主張の根拠を見い出すことが困難であるということが明らかにになった、また革案本「大悟」巻に関しては、たしかに諸伝に伝える叱咤時脱落の文言と比較して多くの類似点が見い出されるのであるが、同時に「身心脱落」の語が、「不是待悟為則」であるとして常日頃から如浄によって語られていたことが述べられており、そこには、むしろ叱咤時脱落を否定する思想内容が書かれていることがわかるのである。

#### 4 心塵脱落誤聴説の追証

次に、心塵脱落誤聴説の観点から、叱咤時脱落説を検討して見よう、まずは、この説の真偽を原典に当たって確かめることから始めたい。

まず『正法眼蔵』の諸巻に如浄の語として伝えられている「身心脱落」の話であるが、多少の語の前後や異同はあるものの、その内容はほとんど同一であり、「参禅者身心脱落也、不用烧香・礼拜・念仏・修懺・看経、祇管打坐始得」というものである。また、これと同じ内容は、『永平広録』にも記載されている(全集第四巻18頁)。しかし、これらの引用は、「身心脱落」の意味についての如浄の説明を欠いているので、これだけでは「身心脱落」が「心塵脱落」の誤聴であった可能性についての手がかりを得ることはできない。

しかし『宝慶記』を見ると如浄が「身心脱落」について説明している部分が三箇所ある。第一は「堂頭和尚示曰、参禅者身心脱落也、不用烧香・礼拜・念仏・修懺・看経、祇管打坐而已。拜問、身心脱落者何。堂頭和尚示曰、身心脱落者、坐禅也。」(筑摩版『道元禅師全集』下377頁)という部分である。

この段は、冒頭の如浄の教示が『正法眼蔵』に引用される如浄の語とそっくりである点において、特に注目に値する。如浄の「離五欲、除五蓋」という説明に対して、道元はさらに、それでは教家の所談と同じではないか、と詰問しているが、これに対して如浄は「不可強嫌大小乘之所説」と教示しており、さらに「近代疑者云、三毒即佛法、五欲即祖道、若除彼等、即是取捨、還同小乘。」という道元の問いを受けて「佛祖児孫、若除一蓋一欲、則巨益也」と答えているのである。このやりとりを見ると、この部分の説明内容自体は「心塵脱落」に関するものであることが分かる。

次は道元の「除五蓋六蓋、有其秘術也無」という質問に対する如浄の答である。如浄は「汝向來功夫、作甚麼、這箇便是離六蓋之法。く祇管打坐作功夫、身心脱落來、乃離五蓋・五欲等之術也。此外都無別事、渾無一箇事、豈有落二落三者也」(同383頁)と述べており、ここでも坐禅によって五蓋を離れるということが身心脱落であると説かれていることがわかる。またこの段で注目すべきことは、ここで如浄が「六蓋」

として無明蓋を立て、「先除五蓋、後除六蓋」と論じていることである。これを先の段における「若除一蓋一欲、則巨益也」と併せて考えるならば、如浄は、煩惱を一気に無化するような考え方は採っておらず、坐禅を通じて諸々の煩惱を脱落せしめるという、極めて常識的な修行観を持っていたものと考えられる。

三番目の用例は「弁肯仏祖身心脱落、乃柔軟心也。」(同384頁)である。これは佛祖の坐禅は大悲を先とするものである、と説く段の最後に出てくる文であるが、この「身心脱落」に関して、当面「身心」であれ「心塵」であれどららでも特に問題はない。

以上『宝慶記』の用例を見ると、如浄は一貫して「煩惱を脱落せしめること」として「身心脱落」を説明しており、やはり如浄の説示は「身心脱落」ではなく「心塵脱落」を説くものであったと考えられる。

次に、如浄その人の思想をさらに再確認するために『如浄語録』を検討してみよう、まず、「身心脱落」の語であるが、『如浄語録』には全く見当たらない。かわりに「心塵脱落」の語が「讚佛祖」の「観音」の偈頌(『天童如浄禅師の研究』348頁)に一箇所見出しされるのみである。

また、「天童景德寺語録」の中に「心念」について次の様な上堂がある。

心念紛飛、如何措手、趙州狗子佛性無、只箇無字、鉄掃掃、掃處紛飛多。紛飛多處掃。転掃転多。掃不得棄命掃。晝夜堅起梁。勇猛切莫放倒。忽然掃破太虚空。万別千差尽尽豁(同上287頁)

この上堂は次々と起こる煩惱を、祇管打坐(=晝夜堅起脊梁)により果てしなく掃き続けることによって、ついには悟りに至るであろうことを説いたものであるから、その思想は「除五蓋六蓋」を説く『宝慶記』での如浄の教示に同じであるということが出来る。

最後に『永平元禅師語録』の序文のことについても触れておこう。この序は天童山において道元と同参であった無外義遠によって書かれたものであるが、そこには「日本元公禅師、截海南来、直入其室心塵脱略処、喪尽生涯」と書かれており、如浄室中の指導が心塵を奪略するものであったことが明記されているのである。

以上『宝慶記』『如浄語録』『永平元禅師語録』などを手がかりに「心塵脱落」誤聴説の成否を検討してきたのであるが、結論として如浄の立場はどこまでも「心塵脱落」であり、坐禅はそのほてしない実践として位置付けられていることが確認されたのである。

## 5 如浄室中での印可証明について

ところで叱咤時脱落説は、「身心脱落」の語で大悟した道

元が、如浄のもとに参じて印可証明を受ける、という話になってゐる。しかしこの時如浄の言葉が「心塵脱落」であつたとすると、如浄は「心塵脱落、脱落心塵」と答へたことになる。次にこの点について検討して見たい。

草案本「大悟」巻には、道元自身の言葉として「身心脱落は脱落身心なり、脱落の脱落しきたれるゆえに、身心脱落なり。ここをもて、不是待悟為則なり。」と書かれてゐる。こゝでの「身心脱落は脱落身心なり」に見られるような、語順の前後を入れ替へる表現形式は、実体的、二元論的思考を破すために『正法眼蔵』に頻繁に見られるものである。この場合についていえば、「脱落の身心」という言い方でもって身心が、自己の実体化から開放されて仏道の働きそのものとなることを明かすのでありそれだからこそ「不是待悟為則」なのだとの主旨を述べたものである。

しかし、もしここが「心塵脱落」であるとしたら、この部分は、どういうことを意味するのだろうか。「心塵脱落」は、心の塵が主体としての心から脱落するということである。しかし「脱落の心塵」は単に主体から分離して「落ちてしまつた心の塵」を意味するに過ぎない。したがつて、この打ら返しには二元論的思考を打ら破るような働きが全くないことになる。要するに、如浄は、ここで全く意味不明のことをいつてゐることになるが、これはあり得ないことである。

また、こうした表現上の問題とは別に、こゝでの如浄と道元との大悟後の「面授」の構図にはもつと根源的な問題がある。つまり叱咤時脱落説では、道元の悟りとは叱咤時に道元自身の内面において「身心脱落」が体得されたことである、というように解釈されてゐる訳であり、それが如浄においてすでに体得されてゐる「身心脱落」と同一であることを両者が相互に確認しあう、という構図で考えられてゐるのである。もし「身心脱落」が個人の内面における意識上の出来事であるとすれば、たしかにこういう構図で考えることも可能であるが、はたして「身心脱落」とはそういうものであるか。もし叱咤時脱落説が前提にしているような構図が事実であるとすれば、こゝで道元と如浄との間に「誤聴」があつたということとは、両者の意識上の事実は同一ではないことになる訳であるから、この嗣法は成立しないと考えなければならぬであろう。

つまり叱咤時脱落説の記載する如浄による印可証明の部分は、如浄の説く「脱落」が「心塵脱落」である限り成立し得ない、というのがこゝでの私の結論である。

（キーワード） 身心脱落 心塵脱落 叱咤時脱落

（刈谷東高等学校通信制過程教諭）